「介護オリンピック」を通じ、介護の魅力を発信

３Ｋ（きつい・汚い・危険）脱却、新３Ｋ（活力・感動・カッコいい）を目指して

所在地　碧南市
特別養護老人ホーム　ひまわり
施設長　村松　英子

【はじめに】法人の概要

当施設は、西三河南部西医療圏内の最南端である碧南市を中心に、ケアミックスの病院を中核とし医療・介護サービスを展開する「愛生館コバヤシヘルスケアシステム(以下、「愛生館」という)」の運営する特別養護老人ホームである。2015 年 11 月に開設したユニット型 80 床の入居施設で、同建物内に養護老人ホーム、55 名定員のデイサービス、ヘルパーステーション、居宅介護支援事業所を併設している。また、愛生館の運営する「超強化型」老人保健施設も隣接しており、介護のユートピアを目指し「ひまわり村」と名付け、地域の中で無くてはならない介護の拠点となっている。現在 13 事業所、250 人以上の介護スタッフが活躍している。

【背景】

愛生館は、介護保険制度が開始される以前の 1998 年から、介護サービスの提供に携わってきた。その当時から介護の仕事はマイナスのイメージで捉えられ続け「３Ｋ（きつい・汚い・危険)」と、ネガティブな印象を与える言葉で表現されて来た。そして、その言葉の与えるイメージにより、誤解を与えているのではないかと思われる。しかし、一方で「介護福祉士」は国家資格であり、超高齢化社会においては、大変重要であり、なくてはならない素晴らしい専門職である。

また、実際に介護に携わっている人たちは、人から感謝されたり、人と人のつながりや絆に喜びを抱き、心から自分の仕事に誇りをもって明るく、笑顔で働いている人ばかりである。なんとかして、介護の職に就いている方にスポットライトをあて、イメージを変化、向上させ、介護の魅力を発信したい。主役として活躍し、褒め称え合える場を作ることで、介護職の方々の働く意欲を掻き立てる原動力とする場を作りたい。イベントを通じ介護のイメージを変える起爆剤になればという思いから、「介護オリンピック」を行った。

【内容】

介護技術を点数評価し、順位を競い合う大会を企画、開催した。2015 年から今年度までに、4 回開催した。介護スタッフは、各部署の代表選手として出場する、応援団として参加する、観覧し自身の介護に活かす、裏方として運営に携わる等、勤務者以外は極力参加するよう促した。また、企画内容としては、会場中が一体感を持て

るような演出を行い、熱気あふれる、楽しい時間を過ごせるように工夫した。以下に各大会の詳細と、その感想と抽出された課題を記す。

◆第１回　2015 年　７月５日（日）13：00～16：00

テ ー マ：介護の質の向上を図り、利用者により安心・安全な介護提供ができる人材を育成する。

競技内容：シーツ交換（個人戦　９名・団体戦　９チーム）
シーツ交換に要する時間と出来映えを点数化し評価する。

感　　想：部署対抗にしたので、団結心が高められた。また、シーツ交換を手早くすることで、本来の介護職が求めている「寄り添う時間」を捻出するために業務を効率化しようという思考を広められた。

課　　題：競技内容を検討する必要がある。時間を競うと、必然的にベッド周りの動作がせわしく、荒くなる。落ち着いた立ち居振る舞いを評価する内容を加えて行ってはどうか。

◆第２回　2016 年　７月 10 日（日）13：00～16：00

テ ー マ：介護の質の向上を図り、利用者により安心・安全な介護提供ができる人材を育成すると共に、同職種間のコミュニケーションを図る場とする。

競技内容：シーツ交換（個人戦　７名・団体戦　12 チーム）

感　　想：近隣の介護福祉士養成高校を招待し、ゲスト参加いただけた。将来の仲間へ愛生館の良さをＰＲできたことは、とても素晴らしかった。応援合戦も工夫が凝らされ、チームワーク向上の一助となり、連帯感を強化できたと思う。

課　　題：実際の業務に直結するような競技内容にした方が良いのではないかという意見が多く上がった。競技として成立し、楽しく、盛り上がる、総合的なバランスを考慮した内容にする必要がある。

◆第３回　2017 年　７月９日（日）9：30～12：45

テ ー マ：「腰痛予防対策」を取り入れた介護技術を普及・向上する。

競技内容：①「腰痛予防対策」を取り入れた移乗動作
～スライディングボード、シートを活用する～
②臥床者がいる場合のシーツ交換
①②共に、要介護者を配役した上で、その方の状況を設定し、「声掛け」「安全配慮」「腰痛予防対策」等が適切に行えているかを採点する。腰痛防止策を取り入れた移乗動作ができることを盛り込んだ。特にスライディングボード、スライディングシート等道具を使用しボディメカニクスを活用する内容とした。各競技１チーム２名で９チームが出場した。

感　　想：実践的な内容となり、即介護現場で活用でき、スライディングボードの普及に繋げられた。このような介護技術を持ち合わせていることが評価されるということが示せた。スライディングボードを活用する姿は、格好良かった。面倒くさい、時間がかかるという理由で使用に消極的だった方も、ボードを使うようになった。

課　　題：「声掛け」などは、台詞を話しているようで、ぎこちなさが出てしまうが、声を掛ける姿勢、目線、声掛けの話題など出場選手により異なり、評価に差が出せるようになった。さらに、介護技術を競える内容にして行く必要がある。

◆第４回　2018 年　７月 29 日（日）9：30～12：45

テ ー マ：接遇に配慮した「自立支援」を目指す。

競技内容：入職３年未満のビギナー部とベテラン部と２部に分け、14 チームが出場した。日常の介護の場面を設定し、ベッドから車いすへ移乗、食堂へ移動する等の場面設定がされた。その際の目線、感染・安全対策ができているか、羞恥心などの気持ちへの配慮、プライバシーの確保、接遇態度、残存機能を活用した自立支援ができているか等様々な項目を採点し評価する。近隣の介護福祉士養成高校もチームとして参加した。

感　　想：模範演技が行なわれ、審査のポイントの解説があり、介護知識の向上が図られた。観戦者も真剣な眼差しで、参加できた。基本の動作の再確認ができ、普段の介護動作の振り返りができた。「声掛け」についても個性があり参考になる内容であった。応援合戦は大いに盛り上がり会場が活気に満ち溢れ素晴らしい時間を共有できた。

課　　題：実践的な介護、最新の介護技術や道具、ロボットなどを活用した、これからの介護技術を披露する場にしていき情報発信の場としていく。

【結果】

毎回の終了後アンケート結果

①介護オリンピックの主旨は理解できたか

②介護の技術が向上したか

③選手として参加したいか

表１「参加者アンケート結果」　（%）

	①		②		③	
	Yes	No	Yes	No	Yes	No
第1回目	60	40	40	60	40	60
第2回目	100	0	81	19	19	76
第3回目	100	0	100	0	18	77
第4回目	100	0	100	0	13	88

フリーコメントとして、多くの前向きの意見も多数寄せられた。また、リハビリ職の従業員も参加したいという意見も寄せられた。その反面、選手としての参加意欲が低下した。これについては、技術の向上に役立ったが、競技の難易度が高くなったことが一因ではないかと推察する。

【これから】

「介護オリンピック」は回を重ねるごとに、愛生館の定例行事として着実に歩みを進めることができた。今後も介護スタッフが輝ける場として継続していく。第３回では、テレビニュースの取材を受けた。何れも、介護業界での先進的な取組として紹介され、インタビューの中でも介護の誤ったイメージを払拭したいという思いが、熱気あふれる競技の映像とともに放送された。当然、愛生館が行ってきた「介護オリンピック」だけでは、ネガティブなイメージを変化させることはできない。しかし、介護サービスの有効求人倍率は 6.56（愛知労働局 2018 年８月発表）となった現在、人材不足が理由で、地域の介護サービスが不足するような事態を招きかねない。是非、他の事業所で働く地域の介護職の方々も参加できるような場に発展させていきたい。

一人でも多くの介護職の方が、新３Ｋ（活力・感動・カッコいい）を実感できる介護サービス事業所で働く「仲間」となってくれることを願い、今後も新たな取り組みにチャレンジしていく。